

バンクーバー冬季パラリンピックは3月12日から21日まで、冬季大会史上最多の44カ国から約5000人の選手が参加して行われた。選手41人、役員53人からなる日本選手団は、金3個を含む計11個のメダルを獲得し、前回トリノ大会の9個を上回る大健闘。アイススレッジホッケーで銀メダルに輝いた遠藤隆行主将が、最も印象的な活躍をした選手として「ファン・ヨン・デ功績賞」を受賞し閉会式で表彰されるなど、実りの多い大会となった。

4年に一度の障害者スポーツ冬の祭典は今回が第10回。バンクーバーでは、ソリに乗って両手にスティックを持ち得点を競う、氷上の格闘技、アイススレッジホッケーと、男女混合で争う車いすカーリング、さらにウィスラーではアルペンスキー、クロスカントリースキー、バイアスロンの計5競技、64種目が実施された。スキー系は立位、座位、視覚障害に分かれ、障害の程度に応じた係数をタイムに掛けて争う。車いすカーリングは水面をこするスレーピングがないなどの特色がある。

以前は障害者のリハビリ的な面が強かったが、近年は競技志向への流れが強まっている。今回の象徴的な存在はクロスカントリースキーのブライアン・マッキーパー選手(カナダ)。重度の視覚障害を持つマッキーパー選手はバンクーバー冬季オリンピック代表にも選ばれていた。パラリンピック経験者がオリンピック代表となるのは冬季では初の快挙で、パラリンピックのレベルの高さの証明になった。オリンピックでは出場機会こそなかったが、今大会で3冠に輝いた。

入場券は冬季最多の23万枚に

「世界で最も住みやすい街」バンクーバーは「世界一、障害者に優しい都市」のひとつ

でもある。至る所でバリアフリー化が進み、大会中は車いすに乗った各国の選手、役員が自由に街を行き来する姿も目立った。前バンクーバー市長のサム・サリバン氏も車いすの使用者。車いすで地球一周したりリック・ハンセン氏はバンクーバーオリンピックの選手村村長を務めた。社会的な理解が高く、多くの日本選手が「人びとが障害者に優しい」と感心する。国際パラリンピック委員会(IPC)によると入場券販売は冬季大会最多の約23万枚にのぼった。

パラリンピックと同都市で開かれるようになったのは、冬季では1992年アルペールビル大会から。かつてはオリンピックとは別の組織委員会により運営されてきたが、2002年ソルトレークシティー大会からはオリンピック組織委と正式な連携がとられるようになった。IPCのフィリップ・クレイブン会長によると、これまではIPC側の働き掛けによりオリンピック組織委員会がパラリンピックの運営にかかわっていたが、バンクーバー大会では自発的に取り組んだ初のケースとして「今後はバンクーバーのやり方が基準になる」と評価した。

メダル11個、歴史的な快挙も

今大会最大のサプライズはアイススレッジホッケー準決勝で日本が2連覇を狙ったカナダを3-1で破ったことだろう。アイスホッケーを国技とするカナダはオリンピックの男女に続く「3冠」を狙ったが、GK永

共同通信社 宮田 宏

もう一つの チームジャパン バンクーバーを 席捲!

バンクーバー冬季パラリンピック
X Paralympic Winter Games 2010



photo by AFLO

瀬川選手の再三の好守、FW上原大祐選手の勝ち越し点で夢を砕いた。決勝では09年世界選手権の覇者アメリカに屈したが、銀メダルは歴史的な快挙。開会式旗手の遠藤選手は「カナダで強い日本を見せられて誇りに思う。パラリンピックを機に、この競技の面白さが日本の人に伝わったらうれしい」と誇らしげに語った。

クロスカントリースキー男子立位の新田佳浩選手は2冠を達成し、日本代表選手団主将の責任を果たした。3歳で祖父、達さんが運転するコンパインに巻き込まれ、左前腕を失った。10kmクラシカルで日本に今大会初の金メダルをもたらすと、92歳の今まで責任を感じ続ける岡山の祖父を思い、「やっぱり最初は、じいちゃんに触らせてやりたい」と笑顔。21日の最終日には1kmスプリントを制し、大会を締めくくった。

またクロスカントリースキー女子立位でも、20歳の太田渉子選手が1kmスプリントで銀メダル。トリノ大会のバイアスロン銅メダルに続く2大会連続のメダルを手にした。一方、悪天候で大幅な日程変更があったアルペンスキーでは目標の10個には及ばなかったものの7個のメダルを獲得した。男子スーパー大回転で狩野亮選手が、果敢に攻める滑りで金メダル。小学校3年生のときの交通事故で両脚の機能を失った24歳。アルペンの高速系種目で日本男子が頂点に立つのは初の快挙だ。滑降でも銅メダルを獲得し、閉会式では日本代表選手団の旗手も務めた。「夢のような時間だった」と言う一方で「技

術はまだまだ未熟で勉強することが多い。4年後はさらに強い選手になりたい」と成長を期す。また森井大輝選手が男子滑降で銀メダル、スーパー大回転では銅メダルと、狩野選手とともに2度の表彰台に立った。男子大回転では鈴木猛史選手が銅メダルを得た。得意の回転で15位に終わった雪辱を果たし「ほかの大会とは比べものにならないほど重い」と感激した。

5大会連続出場と経験豊富な大日方邦子選手は、安定した滑りで回転、大回転で銅メダルを獲得した。これで通算メダル数は、冬季では日本人最高の10個に達した。上乗せを狙った滑降で転倒して首などを痛め、残る2種目は欠場した。37歳で臨んだ今大会を最後に第一線から退く意向でいたが「不完全燃焼。今後は白紙」と揺れる思いを口にした。

初出場の車いすカーリングは日本史上最年長、75歳の比田井隆選手が話題に。成績は3勝ながら最下位の10位で、他国との経験の差がソチパラリンピックへの課題となった。

●日本チームメダリスト、表彰者一覧

- 金メダル (3個)
- 狩野 亮 (アルペンスキー男子/スーパー大回転座位)
- 新田佳浩 (クロスカントリースキー男子/10kmクラシカル立位)
- 新田佳浩 (クロスカントリースキー男子/1kmスプリント立位)
- 銀メダル (3個)
- 森井大輝 (アルペンスキー男子/滑降座位)
- アイススレッジホッケー日本代表チーム (アイススレッジホッケー)
- 太田渉子 (クロスカントリースキー女子/1kmスプリント立位)
- 銅メダル (5個)
- 大日方邦子 (アルペンスキー女子/回転座位)
- 大日方邦子 (アルペンスキー女子/大回転座位)
- 鈴木猛史 (アルペンスキー男子/大回転座位)
- 狩野 亮 (アルペンスキー男子/滑降座位)
- 森井大輝 (アルペンスキー男子/スーパー大回転座位)
- ファン・ヨン・デ功績賞 遠藤隆行(アイススレッジホッケー主将)



滑降座位で狩野亮選手（左）が銅、森井大輝選手（右）が銀を獲得

男子大回転座位銅の鈴木猛史選手はスーパー大回転、スーパーコンビでも入賞



日本選手団主将の新田佳浩選手は、パラリンピックへの4度目の挑戦で2つの金メダルを手に



悲願のメダルを掴み取ったアイススレッジホッケーチーム。その全員が、最高の笑顔みせた



(右) 太田渉子選手は日本の女子で最高成績
(上) パンクーパーオリンピックでは、かつてパラリンピック選手だったリック・ハンセン氏が選手村村長を務めた



大日方邦子選手は日本人初の冬季パラリンピック金メダリストでもある（長野大会）

マッキーバー選手の快挙は多くのパラリンピック選手達に希望を与えた

「バンクーバー対策プロジェクト」JOC初の合同合宿

集まれ、戦え、 チームジャパン!!

昨年、JOCは初の試みとなる冬季全競技のオリンピック代表候補選手やそのスタッフを集めた“合同合宿”を実施した。バンクーバー冬季オリンピックを控えて、この試みの意図はどこにあったのか、その成果をどう捉えているのか、あらためて検証する。

photo by PHOTO KISHIMOTO/JOC

「ういう時こそ皆の力を団結することが必要となります。そのためにはやっぱり『チームジャパン』にならないといけない。じゃあどうしたら、本当のチームになれるのかと考え続けて、とにかく競技の垣根を越えて、全員が一堂に会ってカンファレンスをやりたい、というところに辿り着いたんですね」
味の素ナショナルトレーニングセンターで開催されたカンファレンスで、選手やスタッフは、用意されたカリキュラムをこなしていった。
カリキュラムの柱の一つとなったのは、異分野から日本を代表する講師を招いての講義である。

例えば5月のカンファレンスでは、脳の働きから能力を最大限に発揮する研究などで知られる日本大学大学院総合科学研究科生命科学専攻教授の林成之氏による「勝負脳の鍛え方」と題した講義が行われた。
6月には、メンタルトレーニングの第一人者として知られる福島大学人間発達文化学類教授の白石豊氏による「プレッシャーとどう戦うか」、棋士の羽生善治氏による「決断力」といった講義が行われた。

「カンファレンスでテーマとしていたのは『軸』ですね。具体的には精神面の柱となる『軸』です」
参加者は、大部屋で寝食をともにしながら各3日間を過ごした。「高校時代以来ですね」とはじめは戸惑いを見せる選手もいたが、講義などのカリキュラムをこなし、時間をともにする中で、垣根を取り払っていった。
「選手同士が友達感覚で交流を深めていきましたし、コーチはコーチで、こういう指導の仕方もあるんだ、とお互いに情報を交換して共有することができた。あのように関係を築くところを見ると、やはり皆アスリートなんだなと実感しました」

講義や競技の垣根を越えた交流とともに、カンファレンスで鈴木氏が重視したのは、

冬季全競技のオリンピック代表候補選手、スタッフを集めての「The Conference for Building up Team JAPAN」と題した合同合宿が行われたのは、2009年5月8日～10日、6月5日～7日の計2回、各3日間のことだった。

参加人数は第1回が選手87名、スタッフ63名、第2回が選手80名、スタッフ56名。トレーニングなどの都合で一部欠席者もいたが、大規模なものとなった。推進役の一人が、バンクーバー対策プロジェクト副委員長を務め、バンクーバー冬季オリンピックでは日本代表選手団の総監督を務めた鈴木恵一氏である。

バンクーバー冬季オリンピックが行われるシーズン開幕を前に、こうしたカンファレンスを行った目的について鈴木氏は、「オリンピックで戦うために、文字通り『チームジャパンになること』にあった」と語る。

その理由をこう説明する。
「簡単に言えば、火事場の馬鹿力が欲しいということ。競技中、ちょっとしたでも気が抜ければタイムは落ちるものです。その時バックアップとなるのが、皆の声援であり、火事場の馬鹿力を出す要因でもある。それに、オリンピックのような場所では、一人で戦ってもどうにもならないことがあります。そ、



6月のカンファレンスに参加した選手、関係者。それぞれの笑顔がこの合宿の意義を物語る

彼らに戦う姿勢を植えつけることだった。「もちろん、お互いに仲良くなるという意味もありましたが、それよりも、考え方を变えて欲しかった。オリンピックは代表になって出ることだけじゃなく、勝つことが大前提なんです。そして試合もそうですが、トレーニングをするにしても強い気持ちが必要で、強い者しか生きられない世界なんだということとを分かって欲しかった」

チームジャパンにとって必要なことは？

5月のカンファレンスの最初の挨拶で、鈴木氏は選手たちに語りかけた。いや、檄を飛ばした。「これから、バンクーバーへ向けてカンファレンスをやるが、強制で参加させられている、と感じている者もいるかもしれない。強制されて来ていると思うなら、ドアを開けておくから出て行って欲しくて構わない。オリンピックで勝ちたいと思う選手だけが必要なんだ。行くだけではダメだ。トリノを思い出してくれ。スピードスケートを例に言えば惨敗という言葉をもらった。ほかのNF（競技団体）もそうだろう。皆それを受け止めないといけない。跳ね返すには『チームジャパン』がひとつになるのが大事なんだ」

勝たなければいけない、という方針は、バンクーバーオリンピックの期間中、貫かれた。ちなみに、6月のカンファレンスに講師と

垣根を越えた交流と、勝つ姿勢の共有



羽生氏の「決断力」から得られたものも少なくない



「勝負脳の鍛え方」をテーマに講義する林氏



朝原氏の講義に、どの選手も興味津々の様子



柔道の塚田真希選手も講師のひとりだった



競技の枠を越えた交流が積極的に行われた



携帯電話番号を交換するシーンもみられた



鈴木恵一（すずきけいいち）バンクーバー対策プロジェクト副委員長／バンクーバー冬季オリンピック日本代表選手団総監督

して参加したアテネオリンピック陸上競技4×100mリレー銅メダリストの朝原宣治氏は、「夏の競技もできたらいいなあ」と感想をもらしたという。

このように行われたカンファレンスの成果を、今、どう捉えているか。すると、鈴木氏はこんな話をした。

「競技の終わった選手が、他の競技の応援に行くこともあれば、駆けつけることができなくても、選手村で、『頑張れよ』と激励することもあったと聞きます。競技にかかわらず、応援する気持ちを持たせたということは大きかったし、選手村で生活を共にする仲間が声を掛け合うことが大切なことではないでしょうか。また、トリノでは1個しかなかったメダルが5個になり、入賞の数も21から26に増えた。これはカンファレンスを行ったことへの、ひとつの答えだと思えます」

結果からしても、初めての試みは、少なからず功を奏した。今後は、このカンファレンスを夏季競技の選手に対してどんな形で行うか、そしてカンファレンス内容をどう充実させていくかが求められるだろう。